

## 論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	小西眞弓
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第 15 号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第 13 条
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 18 日
学位論文題目	幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」と保護者支援
論文審査委員	主査 渡辺俊太郎（大阪総合保育大学准教授・博士(心理学)） 副査 山崎高哉（大阪総合保育大学教授・博士(教育学)） 副査 中谷奈津子（神戸大学大学院准教授・博士(学術)）

### 〔1〕 論文の概要

本論文は、保育所等で保育者が行っている幼児をもつ母親の保護者支援について、「子育ての期待と現実の差」の視点から調査、分析を行い、よりの確な支援を行うための知見を得ることを目指している。主な研究内容としては、子育ての期待と現実の差が母親の育児への肯定的感情に及ぼす影響に関する検討、育児不安や育児幸福感が子育ての期待と現実の差に及ぼす影響に関する検討、子育ての期待と現実の差の視点を取り入れた保護者支援に関する検討を行っている。

本論文の構成は、

はじめに

第 1 章 母親を取り巻く現状と保護者支援

第 2 章 本研究の目的

第 3 章 幼児をもつ母親の育児への肯定的感情と子育ての期待と現実の差との関連

第 4 章 幼児をもつ母親の育児感情が親役割に及ぼす影響

第 5 章 教育・保育施設における保護者支援の検討

第 6 章 総合的考察

おわりに

から成っている。以下に各章の概要について述べる。

「はじめに」では、日本における子育て支援施策の流れを概観することを通して、現代の母親が置かれている現状について述べている。少子化対策から次世代育成支援対策への展開や、男女共同参画、児童虐待、保護者支援に関する政策の推移を示す一方で、これら

の施策に基づく保護者支援を行っていくためには保護者理解が必要であると指摘している。

そこで、続く第 1 章第 1 節では、保護者理解の視点として母親の育児への否定的感情と肯定的感情について概観を行っている。先行研究では、夫婦のコミュニケーションや父親の育児・家事参加度、母親の職業の有無など、多様な要因と母親の感情との関連について検討されていた。しかし、そうした様々な状況要因に単に着目するのではなく、保育者が保護者の困難な状況を子育てについての期待と現実の差から捉え、その差の背景を知ること、保護者の課題を明確にすることや、適切な支援を提供することにつながると考えられる。そこで、まず、第 2 節において子育ての期待に関する文献の概観を行っている。先行研究では、母親と子どもとの関係性やソーシャルサポート、多様な専門機関や専門職による子育て支援等の要因と子育ての期待との関連について検討されていた。これらの要因を踏まえつつ子育ての期待と現実の差から保護者を捉えることによって、課題解決に向けた支援や様々な情報提供を行うことが可能になると考えられる。

第 2 章では、本研究の目的と構成、および基本概念の定義について述べられている。本研究の目的は、幼児をもつ母親の子育ての期待と現実の差が、母親の育児への肯定的感情に与える影響を明らかにすること、教育・保育施設において保育者が行う保護者支援において子育ての期待と現実の差の視点から検討を行い、保護者支援に有効な方法を提案することである。

第 3 章第 1 節および第 2 節では、子育ての期待と現実の差が大きいと感じている母親と小さいと感じている母親の自由記述を分析し、年齢の高低や就業の有無などの母親の属性による違いがあるかについて検討している。分析の結果、子育ての期待と現実の差が大きいと感じている母親の自由記述には「育児負担感」「時間の制約」「期待と現実の差がある」等が記載されていた。一方、子育ての期待と現実の差が小さいと感じている母親の自由記述には「身近な人の子育て経験」「育児肯定感」「育児支援感」等が記載されていた。また、どちらの母親においても年齢の高低や就業の有無によって記述内容に違いがみられた。そこで、第 3 節では母親の育児への肯定的感情と子育ての期待と現実の差との関連について、母親の年齢の高群低群および職業の有群無群で比較検討した。その結果、母親の育児肯定感に対して、子育ての期待と現実の差は職業無群で有意な負の影響、年齢高群においても有意傾向ではあるが負の影響を与えていた。

第 4 章では、先行研究において保護者理解のポイントとして挙げられていた「親性」に着目し、「親役割の状態」「子どもへの認識」という親性の二側面から子育ての期待と現実の差を捉えている。子どもとの関わりの中での現在の母親の親性から、自身が親になる前に期待していた親性を減じたものを子育ての期待と現実の差とし、第 1 節では、それが「父親からのサポート」「育児感情」「日常生活での育児幸福感」に影響されているという仮説について検討した。分析の結果、子育ての期待と現実の差は育児感情や日常での育児幸福感による正負の影響を受けていたが、その影響は子育ての期待と現実の差がプラス

であった群とマイナスであった群では異なっていた。そこで、第 2 節では母親が求める保護者支援に関する自由記述について、子育ての期待と現実の差がプラスの群とマイナスの群で比較を行った。その結果、子育ての期待と現実の差がプラスの群では「遊び場の確保」「相談支援（場所）」「子育ての対処法」、マイナスの群では「社会の雰囲気づくり」「長時間労働」「周囲の人の理解」「子どもの成長」に関する記述が多く、それぞれのニーズに応じた支援のあり方が求められていた。

第 5 章第 1 節では、子育ての期待と現実の差の視点から捉えた保護者支援を含む「望ましい保護者支援」を行うために、保育者がもつ主観的な見方である「保育者の保護者観」や「子どもや保護者を支える職員体制」の影響について検討している。調査の結果、保育者の保護者観は子どもや保護者を支える職員体制や望ましい保護者支援に正の影響、子どもや保護者を支える職員体制は望ましい保護者支援に正の影響を与えることが示された。さらに、第 2 節においては、保育者の保護者支援に関する自由記述について、経験年数や保護者支援を子育ての期待と現実の差から捉えた「保護者への共感的支援」の観点から比較を行っている。その結果、保護者支援の内容や技術について保育者の経験による記述の違いがあることや、保護者への共感的支援を行っている保育者は「家庭との連携」「信頼関係の構築」「保育知識や技術不足」に関する記述が多いことが示された。

第 6 章では、総合的考察として、まず第 1 節において研究結果のまとめとその意義について述べている。意義としては、子育ての期待と現実の差が母親の育児への肯定的感情に影響を与えていることを示唆したこと、母親を肯定的感情の観点から捉え、年齢の高低や職業の有無といった側面と子育ての期待と現実の差との関わりに応じた支援の必要性を示したこと、保護者を親性の観点から捉え、親性に関する子育ての期待と現実の差のあり方によって異なる保護者支援の可能性を示したこと、子育ての期待と現実の差の視点から捉えた保護者支援を行うために必要な、保育者の保護者観や職員体制等に関する示唆を提供したことが挙げられている。第 2 節では、まず本研究が質問紙調査の結果に基づく分析を主にしており、回答の主観性や尺度の信頼性・妥当性に関する課題が残されていることや、望ましい保護者支援の実効性が実証されていないことを研究の限界として述べている。さらに、今後の課題として、父親に関する調査、母親の就労形態と求められる支援との関わり、育児への肯定的感情を高めるための支援のあり方、望ましい保護者支援を行っていくための要因の検討が挙げられていた。

「おわりに」では、今後の保護者支援に関して、社会全体で子育てを支える支援体制を整えていくことの必要性や、保護者支援を担う保育者の資質、専門性の向上について述べている。

## 〔2〕 審査結果の要旨

本論文は、論者の保育所における長年の勤務経験から得られた知見をもとに、質問紙調査による検討を通じて保育所等で行われている保護者支援に対して提言を試みるものであ

る。論者の実務経験および大学院における研究の集大成といえる論文であろう。

本論文の意義は、まず、保育所等で取り組まれている保護者支援について、保育者の実践に寄与する視点として「子育ての期待と現実の差」を挙げ、質問紙調査から得られたデータをもってその有用性、可能性を示した点にある。子育てに困難を抱える保護者に対する支援は現代の日本において急務の課題のひとつであり、既に多様な施策が行われている。一方で、児童虐待の相談対応件数の増加など、支援が行き届いていない現状も散見される。子育てに関する支援体制の限界や不備なども指摘されているが、保育現場で支援に取り組む保育者は、現在置かれている環境や資源のもとで眼前の保護者を支援しなければならない。その際に保護者を理解するための子育ての期待と現実の差という視座を提供することは、保育者が自身や自園の支援のあり方を検討していく上で有用となるであろう。

また、保育者はまず子どもの保育を行うことが責務のひとつであることから、ともすれば子どもの最善の利益を図るために、子どもの立場もしくは保育者としての立場から保護者に要求をする場面があるかもしれない。しかし、保護者支援の観点からは保護者の立場に立つことが必要であり、その際に子育ての期待と現実の差という視点を持つことが、保育者にとって保護者理解を深めることにつながる可能性がある。

さらに、本論文においても述べられているように、保護者の子育て感情には、個人の経験や資質、育児環境等の多様な要因が影響している。しかし、リスク要因の有無のみで保護者を判断するのは尚早である。客観的にはリスク要因があるものの「こんなものだろう」とあまり負担を感じていない保護者や、反対にリスク要因は一見無さそうであるが、過大な期待を持っているために苦しさを感じている保護者も存在していると考えられる。子育ての期待と現実の差という視点に基づいて保護者を捉えることは、より保護者に寄り添った理解につながると考えられる。

第1章で述べられているように、子育てに関する期待については、母親の育児感情や育児環境に関する研究において検討がなされてきている。また、子育ての期待と現実の差に関しては、家政学分野で家庭内における夫婦の役割分担について検討した研究が散見される。しかし、保育所等で取り組まれている保護者支援に関して、子育ての期待と現実の差の視点を取り入れる有用性について示した先行研究は少なく、論者の一連の調査、研究には独創性が認められる。また、保育・教育分野に留まらず、心理、小児保健、看護等の多様な領域の先行研究から得られた知見をもとに望ましい保護者支援のあり方を提示している点において、学際性も認めることができる。

以上のように、本論文は高く評価すべき点を備えているが、論文審査の過程において審査委員から指摘された問題点について、主なものを記すことにする。

第一に、第6章でも論者が一部言及しているように、本論文を構成する8つの研究が文献研究もしくは質問紙研究であり、その内容については質問紙で測定された限られた側面に関する検討に留まっている点である。質問紙では、その内容を構成する尺度や設問で回答者に尋ねている内容しか測定することができず、測定している概念の全体像を全体的確

に把握できているとは限らない。また、回答者の回答時の主観に基づくデータであるため、客観的な状態像とは乖離している可能性も否定できない。本論文で得られた知見についても、このような質問紙研究の限界を踏まえ、よりの確に保護者や支援を捉える努力を重ね、検証していく必要があるだろう。

第二に、子育ての期待と現実の差が母親の育児への肯定的感情に及ぼす影響に関する検討、育児不安や育児幸福感が子育ての期待と現実の差に及ぼす影響に関する検討、子育ての期待と現実の差の視点を取り入れた保護者支援に関する検討という研究目的に対して、それぞれ1回ずつの調査による検討しか行われておらず、それぞれの目的追求における深みが足りていない点が挙げられる。各研究目的を達成するためにはそれぞれ今回の研究結果を踏まえた更なる検討が必要であり、今後それぞれの研究を深めていくことが求められる。

第三に、論文の構成や用語の定義等において論旨が明快とはいえない部分も散見される点である。各章の個々の研究は、ほぼ全て査読を経て学術雑誌に掲載されているか、専門学会での発表を経ているため、その内容には一定の質が認められる。しかし、論文全体としては子育ての期待と現実の差という点では一貫しているものの、有機的な構成や各研究の必要性、それについての論者の思考の流れが読み取りにくいことは否めない。また、用語の定義や使用においても論者の主観性がみられる箇所もあり、より慎重な論述や表現が望ましいと考えられる。

以上、論文審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙した。たしかに本論文にはいくつかの問題点が含まれているが、総合的に見て本論文における子育ての期待と現実の差という視点が保育現場での保護者支援の実践に資する可能性を否定するものではなく、今後の研究の進展に対する期待につながるものと考えられる。また、指摘のうち修正可能なものについては、最終提出までに修正が行われるとのことである。

以上の審査結果より、本論文は、博士（教育学）の授与にふさわしいと論文審査委員全員一致で判断した。